論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　心　理　学　）	氏名	水　口　　啓　吾
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

日本語韻律的単位が言語的短期記憶における英単語音声分節化に及ぼす影響

論文審査担当者

主　　査	教　　授	湯　澤　　正　通
審査委員	教　　授	宮　谷　　真　人
審査委員	教　　授	中　條　　和　光
審査委員	准　教　授	森　田　　愛　子

〔論文審査の要旨〕

本論文は,「何故，日本語母語話者は英語聞き取りに困難を抱えてしまうのか」という疑問に端を発しており，その問題点究明の糸口として，日本語と英語における言語韻律的単位の差異に着目している。本論文は全 5 章から構成されている。以下，各章の概略を記す。

第 1 章「本研究の背景と目的」は，6 節から構成されている。第 1 節「日本語母語話者の英語聞き取りの困難さ」では，日本語母語話者が英語習得において聞き取りに困難を生じさせている点を指摘し，その原因について述べている。第 2 節「英語音声知覚における日本語韻律的単位の影響」では，言語の韻律的単位に注目している。日本語韻律的単位であるモーラは，音声を細かく分節する特徴がある点から，日本語母語話者が英語音声を知覚・処理する過程で，音節を韻律的単位とする英語母語話者と比べ，過分な負荷を生じさせ，その結果，日本語母語話者の英語聞き取りが困難となっている可能性を指摘している。第 3 節「日本語母語話者の英語学習による英語音声知覚変容」では，先行研究の動向を踏まえ，英語の熟達化が日本語母語話者の英語音声知覚の変容と密接に関連していることを指摘している。第 4 節「日本語韻律的単位と記憶負荷の関連から捉える新たな観点」では，日本語母語話者の英語音声知覚に関して，日本語韻律的単位と記憶負荷との関連から，以下の新たな 3 つの問題点を提示している。1）幼児期の段階から日本語韻律的単位が英語音声知覚に影響を及ぼすのか。2）幼児期において日本語韻律的単位の影響が示された場合，日本語韻律的単位の影響は，英語教育による英語の熟達化によって変容しうるのか。3）日本語韻律的単位の影響は，第 2 言語として日本語を習得した場合においても示されるのか。第 5 節「英単語記憶スパン課題を用いての英単語音声分節化の検討」では，第 4 節で示した新たな問題点を検討するに当たり，言語的短期記憶における記憶負荷に焦点を当てたこと，検討方法として，英単語記憶スパン課題を考案したことを説明している。以上の背景，問題を踏まえ，第 6 節「本研究の目的」では，本論文の目的と構成を述べている。

第 2 章「日本語母語幼児と中国語母語幼児における英単語音声分節化傾向の検討（研究 1）」では，韻律的単位の異なる中国語母語幼児を比較対象とすることで，日本語母語幼児の英単語音声分節化傾向を検討している。その結果，英単語音声分節化において，幼児期の段階から既に，日本語韻律的単位が影響を及ぼしていることが明らかとなった。他方で，

中国語母語幼児は，日本語母語幼児とは異なり，1 音節～2 音節で構成された英単語を 1 つの音のまとまりとして知覚する可能性が示唆された。

第 3 章「日本語母語成人における英単語音声分節化傾向の検討（研究 2)」は，以下の 2 節から構成されている。第 1 節「日本語母語大学生・大学院生における英単語音声分節化傾向の検討（研究 2-1)」では，日本語母語大学生・大学院生の英単語音声分節化傾向を検討している。その結果，日本語母語成人においても，英単語音声分節化に日本語韻律的単位が影響を及ぼしている点が明らかとなった。第 2 節「英語準バイリンガル日本語母語話者における英単語音声分節化傾向の検討（研究 2-2)」では，英語の熟達化が英単語音声分節化傾向にもたらす影響を検討している。その結果，英語聴取能力の向上が，日本語母語話者における英語音声知覚の変容と密接に関連していることが示唆された。

第 4 章「モノリンガル中国語母語話者と日本語バイリンガル中国語母語話者における英単語音声分節化傾向の検討（研究 3)」では，中国語母語成人を対象として，日本語の熟達化が英単語音声分節化にもたらす影響について検討している。その結果，1 つの音のまとまりとして知覚することが可能であった中国語母語話者が，日本語の熟達化によって，日本語韻律的単位の影響を受け，それを英語音声知覚に転移させる可能性が示唆された。

第 5 章「総合考察」は，第 1 節「本研究の成果と意義」で，本論文において明らかにしたことをまとめ，第 2 節「今後の課題」で，縦断研究の必要性や，英語教授法との実践的な関連の検討など，本論文における限界点および今後の研究の可能性を論じている。

本論文の成果は，以下にまとめることができる。

(1) 幼児期の段階から，英語音声知覚に日本語韻律的単位の影響が存在していることを明らかにした。

(2) その影響は，英語教育を受けてきた日本語母語成人においても，根強く存在していることを明らかにした。

(3) 他方で，日本語母語話者における英語能力の向上，特に英語聴取能力の向上が，英語音声知覚の変容と関わっていることを示唆した。

(4) 第 2 言語としての日本語であっても，熟達化によって英語音声知覚を変容させてしまう可能性を示した。

以上の成果は，次の点で高く評価できる。社会のグローバル化に伴い，日本においても，英語習得の必要性が高まっている一方，日本語母語話者における英語習得の困難さの原因については，未だ明確な究明に至っていなかった。このような現状において，本論文は，日本語韻律的単位が日本語母語話者における英語聞き取りを困難とさせる原因の 1 つであることを明らかにしている。この点で，本論文は，日本語母語話者の英語能力を向上させる上での重要な糸口を示し，今後の英語教育に対する示唆は大きいと言える。

以上を踏まえ，審査内容を総括した結果，本論文著者は，博士（心理学）の学位を授与するにあたり，十分な資格があると認められる。

平成 26 年 2 月 12 日